

ガス灯とメルヘンの世界

「百塔の街」と呼ばれるチェコの首都・プラハには、何度訪れてもクラシックな郷愁を呼び覚まされる街の風情と情緒が漂っている。市内中心部をスメタナがこよなく愛した「ヴルタヴァ」(ドイツ語名モルダウ)川が、南北にゆったりと流れている。とりわけそのヴルタヴァ川に架かるカレル橋から眺めるプラハ城の優雅な姿は、プラハを訪れた人をして、また訪れたい気持ちで魅了してしまうのである。

市街にはどことなく垢抜けていて、心が洗われるような奥深い趣があり、古い伝統を窺わせ、その佇まいに底知れない魅力を秘めている重厚な都市プラハには、冬になると思いがけず忽然と現れるメルヘンの世界に思わず立ち戻らせられることがある。雪がちらつく中を人影もまばらな道端を寒さから身を守るようにマントを抱え込んだ少女が、ひとり小走りに立ち去る影にハッとさせられる。ひよっとすると、これはアンデルセンが描いた「マッチ売りの少女」のファンタジーではないだろうか……。

旧市街では、昔の庶民生活の面影を今に伝える、メルヘンの世界へ誘ってくれる幻想的ないとなみに行き合うこともある。プラハ城広場の周辺には夕暮れ時になると、先端に火種をくるんだ古典的なステッキを持ち魔術師のような素振りで、街灯にひとつひとつ小さな明かりを灯しながら歩いて巡る男の姿を見かけるのである。その仄かな情景には、人類が発明した文明の利器を、頑なに伝統的な仕草で昔ながらの作法を継承しているんだとアピールする気概のようなものが感じられる。

18世紀末イギリスに生まれ、明治の初めに日本各地にも普及しながらも、今では小樽運河や、横浜馬車道などごく限られた場所や、NHK 朝の連続ドラマ「あさが来た」でしか見られなくなった近代文明の遺産「ガス灯」が、ここプラハでは長い間実用に供され、それが近年になって街の観光に魅力的なアクセントをつけて観光客の興味と関心を呼んでいるのである。

寒い外気の中でいかめしい男が、何かつぶやきながら隣のガス灯へ立ち去る後ろ姿を少し離れて見ていると、ジーンと胸に熱いものがこみ上げてくる。異国で感じる明治の残照でもあろうか。

(近藤節夫)